

2001年1月号

<主な内容>

2001年のヴィジョン(1-8頁)
北米ホーリネス教団の歴史(9-10頁)

OMS Holiness Church of North America
<http://www.omsholiness.org>

れ い せ い
聖 聲

Web Version

二〇〇一年のヴィジョン

新年のヴィジョンを到着順で掲載
させて頂きました。(括弧内
は教会の略名です。)

荒野に道、砂漠に川

安藤秀世(ラスベガス)

十周年・砂漠を旅すること十
年!!まだまだモーセには及ばな
い。人が普通に歩くと一時間三マ
イル行ける。一日八時間歩いたと
して二四マイル。一年で(安息日
を抜かし三三日として)七五一
二マイル。四十年で三十四万八
十マイルも歩いた計算になる。三
十万マイルもよく歩いたものだ。
ラスベガス往復は六二〇マイル。
一年に平均二四回(月一回の割合)
行ったとして十年では一四八八〇
〇マイルの走行距離。これもよく
走ったね。この間車二台ダメにし
て今三台目。そろそろ何か手立て
を考えた方がよさそうだと思うの
だが・・・

願い・・・毎週礼拝を持つことを
二一世紀のと言つより二〇〇一年

の目標にしている。私一人ではど
うしようもない。みんな、黙って
ないで何とか言つてよ。何とかし
ようと具体的に考えてもらえない
だろうか。そろそろ教団が動
き出しても良さそうに思うのだけ
ど、ムリですかね。教団にはそ
れだけのビジョンはまだないで
すか?開拓教会の事だつて、もう少
し考えた方が良くと思うんだけど。
淋しい、つらい思いをしながら、
戦っているんだから、もつと助け
てあげてよ。開拓や宣教の経験が
なくても、み言葉に従えば、それ
がマニュアルだから・・・とにか
く、ラスベガス毎週礼拝した
い!!!何か良いアイデアがあれ
ば教えてください。

出席者・・・今出席してください
ている人は、七人。コンタクトを
続けている人は五人少なくとも二
〇〇〇人はラスにいるはず。日本
語の教会が望まれて久しい。日本
からも大勢ビジターがある。どう
してこれがほつとけますか?

ビジョン:ビジョンのないのは
罪だ!!とある牧師はいつた。信
仰は、神様だけを信じていれば良
い、なんてもんじゃやない。神さま
を信じているだけだったら、それ
は単なる有神論ではないか。信仰
の基本は、あの十字架のイエスの
死だ。寝てみる夢は単なる夢、ド
リーム。醒めた意識で見る夢は、
これを幻と言ひ、ビジョンと言つ。
ビジョンのない者(教団)にはチャ
ンスがない。あつても見えてこな
い。「うまい話には罫がある」は世
俗の言葉、「うまい話はあるもの
だ」これが信仰の世界。福音のた
めの幻には、主が熱心をもって必
ず成就してくださる。主のため福
音のため、望み得る最良の目的設
定をしよう。成し得る最善の努力
をしよう。信仰は働く事だ!愛は
労苦すること。望みは忍耐を持っ
て、これを成就しよう。(第一テサ
ロニケ一・三)ビジョンのないの
は罪だ。努力しないのも罪だ。ま
して、同じキリストの教えを批判
したり、ビジョンにケチをつけた
りするのは罪だ。一緒に働く事が
出来なければ、せめて祝福を祈る
くらいの事はしようではないか。
二一世紀に向つて、掛け声だけ
ではなく、実際何かしよう。

ラッドとし子(サンディエゴ)

新世紀を迎え、クリスチャンとして使命について考えてみたとき、伝道以外にないと思う。新しい年を迎えるに当たり心に浮かぶことは、最も古くて全く変わることはないのが「イエスキリストの真理」であり、ありのままを伝えてゆくこと、それは一冊の聖書がすべてを語り、すべてを伝えてくれていりし、メッセージによって養われてきた。

伝道の方法は、時代と共に確かに変わってきている。個人伝道、訪問伝道、文書伝道、家庭集会等、若さとその時代に応じた伝道をして来たと思う。しかし、今新兵機であるコンピューターのウエップ伝道、Eメール伝道等へと進んできていく。

私自身年を重ねるにつれて、体力と周りの状況に応じた伝道の方法へと変わりつつある事に気づかされている。クリスチャンにとつて「伝道には終わりが無い」。どのような状況に置かれても、何らかの形で伝道はできると思うし、この精神だけは生涯持ち続けて行きたいと思っている。これが私に与えられた使命だと思つ。

教会では十数年前に「クリスマス・カードはお互いに廃止しよう」と言う小さな運動が起こった。私も同調していたのだが、ふと考えると、これは文書伝道につながるのではないかと思いつき、私はその逆行を行こうと決心した。勿論教会内では廃止した。

九三年にワードプロセッサを買ってきて習い始め、クリスマス・カードに「旅日記」を添えて送ることにした。誠に小さい文書伝道だが、一人でも多くの未信者の方々に読んでいただければ幸いである。ワープロはアドレスも全部打てて誠にありがたい。私の下手な字で書いた文章などはとても出せない。誠に感謝である。

始めの年は百通からはじめた。二〇〇〇年のクリスマスには三百通印刷し、二五〇部はすでに配った。毎年足りなくなつて追加印刷している。

九六年に私達の教団でイスラエルへの研修旅行があり、それに参加させて頂き、その「旅日記」を書いた。「イエスの足跡をたずねて」の日記は、計四年間にわたつてクリスマス・カードと共に書き送った。これは大変色々な方々からレスポンスを頂いた。



二〇〇〇年には主人の甥の「トレイシヨナルな結婚式」について書いた。離婚の多い昨今、結婚に対して聖書がどう教えているか、「結婚は神が制定されたものである」事を知って頂き、夫婦が仲良くやって行ける秘訣が、聖書の中に書いてあることを知ってもらいたいからである。しかし、興味を持って読んでもらわなければならない。考えなも立たない。考えながら優しい文にしているつもりである。

小さな伝道だが今年日本へ百通、アメリカの各地の日本人へ百通、教会の友達へ五十通配った。また嬉しいレスポンスは、日本へ帰られた方が、「教会へ行くように示され、教会へ戻ります」。日本からの電話で「心を覚まされました。きちんと教会へ行きます」。「子供のバイブルを探して買いました」。「聖書を買いました」。「教会へ行ってみます。」など誠に私はそのようなお便りを受け取るたびに励まされ、感謝である。

今はワープロからコンピューター

へと進み、Eメールでの文書伝道に励んでいる。或る方へは教会を紹介した。その方は礼拝出席を始められ、礼拝の様子などをEメールですぐ知らせてくれる。その場合私もすぐ返事を出す。返事を出すことは、伝道する上に最も大切なケアである。

又私のウエップサイトにも、「旅日記」や、入信の証を日本語、英語で載せてあり、これからも増やして行きたいと思つている。

これらの文書伝道が出きるようになったのも、中尾先生がワープロとコンピューターの使い方の指導をして頂いたお陰と、何時も心から感謝している。「中尾先生有り難う御座います。」

新世紀を迎え、信徒の一人として、主がなして下さつたご愛を思う時、じつとしてはいられないと励まされる。誠に小さな文書伝道であるが、イエス様のご愛に報いるべく私なりの方法で励みたいと思つている。自分の頑張りには限度があるが、上からの力を頂き、祈りつつ前進し、また健康を管理しながら、主人の私への理解を感謝して、今年も主にお従いしていきたいと思つている。

西井孝子(サンディエゴ)

私が、サンディエゴの教会で、
奏楽の奉仕をさせていただいて、
二〇〇一年の夏でちょうど10年
になるうとしています。始めた頃
は、クリスチャンになってまだ日
も浅かったこともあって、ただた
だ緊張の連続で、一体どうなるこ
とかと思いました。しかし神様が
それをしなさいと、私におっしゃ
ったことだけはわかりましたので、
その都度神様に頼り、祈って助け
ていただき、今に至っています。
今思うと、神様が使って下さるな
ら、実力不足の者でもお役にたつ
ことが出来るのだということをし
身をもつて知ったすばらしい体験
です。

そして今では、礼拝ごとに会衆
が主に向って賛美をする、そのお
手伝いが出来ることは私にとつて
この上も無い喜びとなっています。
新しい年も今迄にまして、会衆一
人一人が心から神様を賛美でき
よう、その伴奏をさせていただき
たいと願っています。幸い、神様
がもう一人すばらしい、プロフェ
ッショナルなピアニストを、日本
語部に与えてくださっていますの
で、一人では作れない音を、二人

で協力して編み出していきたいも
のです。きつと、天国は口では形
容しようのない、美しい音楽が流
れている所だと思っておりますが、こ
の世にあつては、せめて礼拝で心
をこめて、賛美の伴奏をさせてい
ただきたいと思つてやみません。
新年にあたつて、もう一度心を新
たにし、神さまから頂いたご奉仕
を、更に喜ばれるものとして使っ
ていただきたいと望んでいます。



祈りの訓練

スミスヒデ子(サンディエゴ)

信仰生活の中で祈りがおろそか
になるということは、神様との関
係が衰退していくことを体験させ
られている。私個人のことだが、
ひとり娘が家族全員で我家に舞い
戻り、彼らの家族と共に生活をす
ることとなった。三人の手のかか
る孫達、彼らとの人間関係、狭い
我家での六人暮らしが始まった。
それ以来私の祈り、聖書通読、日々

のデイポーションの時間は、かな
り束縛され今までのように時間が
とれなくなった。四年間の共同生
活の後、最近彼らは独立し、再び
我家から巣立つて行った。やんち
やな孫達の居るときは何時も笑い
が耐えなかったが、今がらんとし
た家の中は少々淋しい。沢山の思
い出を残して行つてくれたので、
思い出すと懐かしい。それはそれ
なりに良い時であった。

二〇〇一年を始めるに当たり、
今までの環境を一変し、日々のデ
イポーションを充実させ、祈り、
聖書を読み、イエスキリストとの
交わりを深める訓練をさせて頂い
うと決心した。どのような用事が
あつても、時間を決めて主との交
わりを深め、喜びに満たされた真
実な祈りの生活をしてゆきたい。

当サンディエゴ教会は、今年創
立七十周年を迎えた。盛大な祝賀
会も執り行われた。この背後には、
多くの祈りが積み重ねられ、長い
歴史の歩みは、訓練と、支えによ
つて今日或る事を思ふ。先輩達は、
常に心を合わせて祈り合つてきた
と言ふ。ちょうどエルサレムの初
教会を想像させられる。

北米ホリネス教団は、数少ない
若者たちが伝道のために立ち上が

り、彼らは常に救われる人々のた
めに真剣な祈りを捧げ、極度の貧
困にも耐え、戦争にも巻き込まれ、
そのため、教会閉鎖を余儀なくさ
れるなどの試練にあい、その中を
通されても、尚且つ真剣に祈りつ
づけ、伝道に力を注いできたと聞
いている。

このような尊い我等のバイオニ
アの汗と涙と、愛の労苦の信仰が、
今もこのサンディエゴの教会に力
強く働いている事を私は信じてい
る。この様な土台のある教会を受
け継いでゆくためにも、祈りによ
つて支えていくことが私の使命だ
と思つている。

祈らないという事は、決して神
様を忘れたということではないが、
日々の信仰生活に喜びがなく、神
様から遠くなつていける事に気がつ
かない。恐ろしい事である。やが
てこの世と同じような生き方をし、
肉で生きるものとなつて行く。

密室の祈りの中で心静かに神様
と向かい合う時、必ず神様との素
晴らし関係が回復されることを信
じている。

新世紀の始め「信徒のヴィジヨ
ン」を考えるに当たつて、私の祈
りに対するこの動機を実行してゆ
きたいと願つている。

玉川トーマス（ホノルル）

ホノルルキリスト教会。私達の教会です。ハワイ、オアフ島の、緑に包まれた住宅地、マノアにあります。マノアは平素静かなところです。しかし、私達の教会は違います。たくさん車が出入りします。絶えず、人が動いています。働いています。

牧師のオフィスにはいつも誰かがいます。話をしています。それが教会のメンバーである時もあります。執事である時もあります。ノンクリスチャンである時もあります。笑いながら話している時もあります。真剣に話しているときもあります。涙を流しながら話している時もあります。

孤独の中にいる人が頼ってくる。ことができる教会です。そして、ホツとして家路をたどる姿が見える教会です。

教会のオフィスではたくさんの方が働いています。コンピュータを使う人、コピーをしている人、電話で話している人。ハワイにある二つの日本語ラジオ、テレビ局でながす、教会のプログラムの作製をしている人、何か、忙しく動いている人がいます。深い考え事

をしている人もいます。

昼間教会に集う私達です。キリストの愛を知っている私達です。キリストの愛を喜びをもって、情熱をもって伝える私達です。神様をまだ知らなかった頃の自分をよく知っている私達です。未信者の心を良く理解できる私達です。

教会は夜遅くなっても灯りがついています。多くのグループの集いがあります。大きなグループもあります。小さなグループもあります。ギターに合わせ、賛美をしています。それが聞こえます。礼拝の賛美をリードする賛美チームの練習です。バイブルスタディーをしているグループがあります。輪になつて話し合いながら進めているグループもあれば、リーダーが中心となつて教えているグループもあります。祈っているグループ、礼拝でするスキットの練習をしているグループもあります。スキットの練習には子供達も混じっています。私達の教会では誰でも奉仕ができます。家族がひとつとなつて奉仕しているのがあります。家庭の大切さを良く知っているからです。親子共に真剣です。

ハワイ、オアフ島、約四万五千の日本語を理解する人たちが住む

島です。私達はどこにどんな人達が住んでいるか知っています。いろいろな場所でケアグループをもっています。七、八人の人々が集います。そこではバイブルスタディーをします。また、祈ります。お互いを良く知っています。何でも相談できる集会です。

日曜日です。遠くから、近くからいろいろな人が礼拝に来ます。一度来た人は、また来ます。新しい人を連れて来なくなる礼拝です。礼拝堂はいつも人でいっぱいです。讚美が始まりました。讚美チームがリードしています。礼拝堂は集った人々の讚美であふれています。ある人は両手を高く上げながら、またある人は目を閉じて、心の底から讚美を楽しんでいます。ある人は最新のビデオシステムによるスクリーンに映しだされる讚美の一字一字を噛みしめながら、ある人は立って、ある人は座って。ある人は身体を大きく動かしながら、直立不動で、笑いながら、涙をながしながら、力いっぱい讚美しています。

説教のときです。たまには教会のメンバーの証しのときもあります。また、神様を知らない人でも、聖書の知識がない人でも、誰にも

よくわかるやさしい言葉で、ある時は厳しく、ある時はいたわりをもって、しかし、いつも神様の、イエス・キリストの愛が感動をもつて伝わってくるメッセージです。私達の教会。愛に満たされています。喜び、感動を与えます。私達は神の家族なのです。

教会。こんな教会であつて欲しい。こんな教会にしたい。教会に来る、誰もが持つ思いは？そんな思いを持ったものが、人集まりました。牧師先生を交えて、その思いを分かち会いました。夜遅くまで話し合いました。そこで話されたことを基にして教会のイメージを書き上げました。はっきりとしたイメージではありません。ただ二回目の話し合いです。この話し合いの事を知った教会員の中から怒りが発せられました。なぜ自分達もその話し合いの中に入れてくれないのか！と。感謝します。この話し合いはこれからも続きます。二十一世紀が始まりました。ホノルルキリスト教会は動き始めました。イエス・キリストが私達に建てさせようとしておられる教会。私達でしか建てることのできない、その教会の発見に向けて、祈りをもって、力強く歩き始めました。お祈りのサポートをお願いします。

吉谷礼子（ツーソン）

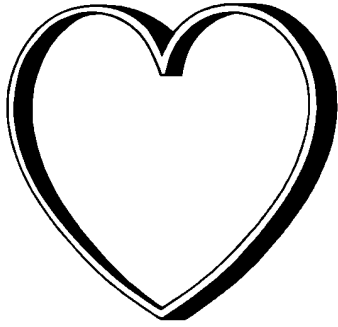
私には自分のヴィジョンというものがあります。しばらく前からそういうものは捨てました。私の関心は、主イエス・キリストが今私との関わりの中でどのようなヴィジョンを持っておられるか、私自身をどのように「ごらんになり、どの部分を修正なさりたいか、又どのように成長させたいと願っておられるか、私の将来にどのような期待を寄せられておられるか、それらを日々懸命に探りたいだけです。主は私たちすべての人間に、そのひとりびとりの関わりにおいてヴィジョンを持っておられます。そこからすべてのお働きははじまるのでしよう。すべてのお働きは・・・。

自分の中から始めること。自分の深みの中で、主とじっくりと対峙し、「ごまかしなく、自分の弱点、弱点と向かい合うこと、その中で私たちは自分の無力さをはつきりと知らされるでしょう。そして、主の生命、その力、その思い、その望みより尊いものは、この世には無いことを心直体験し、その生命による満たしを日々願いつつ、祈りつつ、生きること、それが私

のヴィジョンと言えるでしょう。すべてはそこから始まるのです。

人間が思考し得る、希望し得る、期待し得る、計画し得る、すべての事柄、いわゆるヴィジョンと言われるものは、そこからスタートするのでしよう。そうでなくては神の国は何ものでもありません。

思いめぐらせば、主の私の人生に対するヴィジョン、主との共同作業へのヴィジョンは限りなくあるのでしよう。主には限界がないからです。私自身が自分の殻を破って主との自由な交わりに入りさえすれば、それは実現しますでしよう。20世紀の終りの日に、21世紀を目前にして、主イエス・キリストが私のすべてのすべてでありますように・・・これが私のヴィジョンです。



ピーターズ尚子（ツーソン）

四年程前、まだJCCCTの礼拝が吉谷家で行われていた頃、私はあるテレビ番組を通して、一つの幻を見ました。その番組であるコマ師が色々なコマを作り、それをまわして披露していました。その一つに今まで見た事のない巨大なコマがありました。その巨大コマがコマ師によつてまわされ、その回転がピークに達した時、コマ師はその巨大コマを逆さにひっくりかえしました。なんと、その巨大コマの中から何十個という小さなコマが回転しながら飛び出してきただのです。もちろんその巨大コマも小さなコマ達も勢いよく回転し続けているのです。この場面を見ながら私はJCCCTの将来が写し出されていると思つたのです。

JCCCTは五年程前、神によつて回し始められました。今年本多牧師家族を迎え、私達JCCCTは更に勢いよくピークに向かって回り続けています。そのJCCCTの中に神は数々の新しい命を誕生させ、新しい子供達を招き入れて下さいました。この子供達は「日曜学校」と称される中で、子供達の礼拝を持ちます。日曜礼拝の初め

二十分間は大人達と共に座り、祈り、賛美歌を歌います。そして本多牧師から子供向けの説教を聞きます。しかし、子供達はこれだけでは賛美したりません。子供達はホルルに場所を移動し、大きな声で神に賛美します。そして牧師から聞いた説教を更にくわしく日曜学校の先生から学び、生活に応用出来るようにします。JCCCTの最も特徴的な所は、これが全てバイリンガル（日本語と英語）で行われている事です。もちろん大人の部も子供の部も両方です。

私達は今アメリカの国にいます。でも将来、一生涯アメリカに留まり続けるとは限りません。アメリカ力はクリスチャンとして生活するにはとても居心地の良い国です。しかし、忘れてはいけません、私達クリスチャンはこの世において「地の塩」でなければならぬ事を！塩が塩として使われないのは、1タラントをもらつて土の中に埋めてしまった人と、なんのかわりもありません。塩は少しの量でその効力を発揮出来ます。私達クリスチャンは、この塩の力と同じように世の中の腐敗を防ぐ力が与えられています。しかし、私達はソルトシェーカーの中にいて塩とい

うタイトルに甘んじてはいけ
ないのです。塩はシェーカーから
振り出され、使われなくてはなり
ません。

このJCCDの中で育てられ
ている子供達は、「塩」として使わ
れる為、その回転を伝えられ、そ
の回転が巨大コマと同じになつた
時、ひっくりかえさせられ、子供
達はその中から出て行きます。

日本の国では英語が通じません
日本への伝道は日本語でなければ
ならないのです。世界を幅広く見
つめ、そして一歩一歩地を歩く、
そんな伝道を私達JCCDは将来
のヴィジョンとしています。



ウェルチたか子(ツーン)

神の御名を賛美いたします。

使徒一〜五章では初代教会がど
のようにして形成され営まれたか
を知る事ができます。私達の教会
もこの初代教会に似るところが多
く、教会という建て物はなく牧師

もおりませんでした。でも主を信
じる者達が心を一つにして神の御
言葉を学び、伝え、どんなに小さ
な事でも皆で分かち合い、喜び合
って来ました。その中で溝口先生
を始め多くの牧師の方々がこのツ
ーサンの教会に来て下さり、神の
御言葉と教会の本当のあるべき基
本の姿がどういふ事を教えて下
さいました。

私達の小さい教会では経済的に
牧師を御迎えするという事は夢の
ような話で、そのような思いは心
の底の底に押しやられていました。
ところが神の大きな恵により今年
の九月から本多一米牧師とその御
家族を私達の教会に与えられまし
た。それも皆様のお祈りと諸教会
の経済援助によるもので、私共一
同感謝すると共になお一層主イエ
スを信じる者として心と思いを一
つにして神から与えられた私達の
賜物を生かし神に奉仕すると共に
早く経済的にも自立できるよう努
力していきたいと思っております。
主イエスによって私達に示された
愛を今度は私達が分け与える事が
できるようにこれからJCCDの
霊的成長と経済成長を心に留め多
くの方の魂が救われる教会にして
いきたいと思えます。

「主に信頼して善を行え。そう
すればあなたはこの国に住んで安
きを得る。主によって喜びをなせ。
主はあなたの心の願いをかえら
れる。あなたの道を主にゆだねよ。
主を信頼せよ。主が成し遂げて下
さる。」(詩篇三七篇三〜五節)



中山輝夫(サンタクララ)

サンタクララ教会の歴史は一九
五〇年に一人の日本語部の兄弟がサ
ンノゼでの開拓伝道を決意された
ことに端を發しました。その後世
代の移り変わりと共に、人口の多
い英語部がより大きく成長しまし
たが、日本語部も恵みの内に成長を
続けています。一世、婦米二世の
諸先輩のホーリネス信仰が今も教
会全体、特に日本語部のバックボ
ーンですが、出席者の顔ぶれは年代
の広がりと共に実にバラエティー
に富んでいます。

サンタクララ教会は技術最先端
企業が集中したシリコンバレーに
位置していることを背景として、
一時的駐在の日本人派遣社員とそ
の家族や、永住を目指しての新
世とその家族が日本から多く送り
込まれてくる環境下にあります。
また、国際結婚の新しい方たちも
どんどん教会に加えられています。
そのため、英語部・日本語共に幼
い子供達の数がどんどん増えてい
ます。

一方シリコンバレーの環境は、
未曾有の流入人口により、その生
活環境・インフラは悪化するばか
りですが、それでも人々は「ハイテ
ク」に魅されてここにやって来ま
す。しかし「ハイテク」に囲まれた生
活はまた、「ハイストレス」いっぱい
の生活でもあります。

サンタクララ教会はそのような
「ハイストレス」にさらされた日本
語を話す方たちへのミニストリー
の重荷を負っています。主はサン
タクララ教会を祝福してください、
二〇〇〇年も前進させて下さいま
した。週日のおもに奥様方への集
会(水曜日朝の祈禱会、聖書を学
ぶ2つのクラス、金曜日伝道前
段階の白百合会、英会話クラス、
ビジネスマンへの昼食時の集い)

は引き続き恵まれています。またこれら集会への参加者の子供達と共にご主人方を教会・礼拝に導く試みも主は豊かに祝福して下さいました。

しかし、英語部も含めたこれらの多様性のゆえの恵みと共に、成長にまつわる悩み・課題が多くあります。最大の課題は、教会の施設が飽和以上に達しており、これ以上の成長を明らかに阻害している事です。今、成長の必要を満たすための次の大きな大胆なステップを取るべきチャレンジを与えられています。

このためにも英語部との一体感の強化が必要です。日語部は人数・財政面ではマイノリティーであり、英語部とのシナジーワークを高めねばなりません。礼拝時の子供達のケアも大きな課題です。ご主人方がもつと教会につながるための働きも強めたいと願っています。また教会のパイオニアである年輩者への配慮、中間年齢層がもつと奉仕の輪の中に加えられることも課題です。また、多様性の中で欠けているものとして、学生の層が薄いのと彼らへのアウトリーチが組織化不足であることもあげられます。

二〇〇〇年九月から中尾先生ご一家が赴任されましたが、新年を迎えるにあたり中尾先生はルカ五・四を二〇〇一年の主題聖句として選んで下さり、「深みに漕ぎだす」とのご方針のもと、伝道、学び、交わりの三つを深めるとの目標を示して下さいました。

色々ここまで書いたことは、ビジョンと言うよりは課題の羅列になつてしまいましたが、中尾先生の示されたご方針・目標をフォロイすることが教会の課題の解決にもつながらることを信じ、先生と私たち信徒が役割をきつちりと分担しあいつつ一体となつて、新年・新世紀の働きを進めていきたいと願っています。

「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやいなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」(テモテ四・二)

FAITH HOPE & LOVE

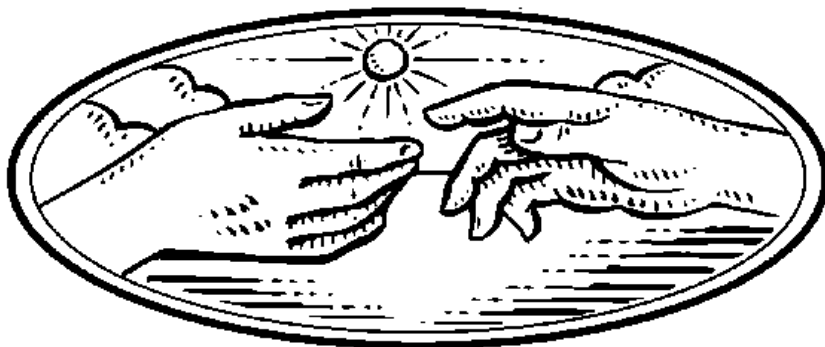
主が選ばれた地で主の教会を
高本とみ子(ウエストオアフ)

ウエストオアフ・キリスト教会は一九七二年にミッションとして始まり、七三年に日語部を設け、七四年にはパールシティ・ハイランド・ホーリネス教会となりました。二七年余りの教会の歴史のその時々、驚くほどの神様の御業を目のあたりに見せていたゞきました。

そして今、さらに主の栄光を仰いでいます。それは、ホノルル市はオアフ島西部地域の開発を進め、第二のホノルルを作る計画とともに、ハワイ大学の分校も出来る事となり、若い世代の人々がこの地域に移り住んできているからです。主は勿論それら全てをご存知で、私達の教会のためにこの地を選び、教会堂を与えて下さったのです。多くの方々への祈りと献身により教会の土台は据えられ、主が選ばれた地で私達の教会はさらに建て上げられようとしています。

二〇〇〇年九月に新しく迎えた中村牧師を中心に、二一世紀を踏み出すこの時、私たちは心新たに主からの導きをいただいで、伝道に励みたいと願っています。具体

的には、新しく来られた方々を主の愛を持って暖かく迎え、真の喜びと安らぎを得ていただくように心がけます。そのために、私達人一人一人が救いの確信をしつかりと持ち、外に出て行くことを恐れず、主との出会いを提供することのできる主に喜ばれる教会、主の教会を建て上げたく願って居ります。



主に喜ばれる教会

マーシャル初音

「主に喜ばれる教会」

私達に与えられた二〇〇一年の教会の標語は「主に喜ばれる教会」(マタイ一六・一八)を建て上げるのである。即ち岩の上に建てられた堅固な教会の建設である。昨年九月、私達の教会を九年間牧会して下さった中尾先生を送り出し、今は吹上先生を中心として、ランチョウ・ラコスタ教会の大倉先生の協力のもと、信徒一同礼拝を守り、信仰に励んでいる。

祈りのうちに与えられた二〇〇一年の私のヴィジョンは

救われる人、受洗者が与えられること。

早天祈禱会、礼拝、聖書研究会、水・木曜集会や各区の祈り会に、もつと多くの出席者が与えられること。

聖霊様の働きやすい教会であること。

メンバーの一人一人が聖霊のお取り扱いにより、主の愛にあふれた暖かい証し人として、良き交わりと伝道ができること。

などである。

「祈りとデイポーション」

その為に一番大切なことは、家庭でのデイポーションと教会での真剣な祈りが必要だと思う。私自身本当に祈りの足りないものなので、今年こそは充実した祈りとデイポーションを第一とし、真剣に取り組んで行きたいと決心した。数ヶ月前から女子朝祈会が教会で始まった。木曜集会のあとの話し合いのとき、一同祈りの足りなさを示され、思いが一つになって祈る会を始め様と言う事で始まった。私達は男子朝祈会に劣らず、女子朝祈会で大いに祈ろうと話し合った。女子朝祈会は毎月一回、第四土曜日朝八時より十時まで当サンデイエゴ教会で行われ、どなたでも参加できる。祈りの素晴らしさを噛み締め、祈りは応えられると確信をもつて祈っている。

「伝道」

私の体のことなのだが、椎間板ヘルニアが持病にあり、直腸がんの手術のあと人口肛門のお世話になっっているが、神様の哀れみにより、全ての集会に出席できるまでに強められ、誠に感謝である。一週間の疲れも、休めば各集会に出席でき、聖日には教会の早天祈禱

会、礼拝、聖書研究会、聖歌隊の練習(一時間位)等を守られて出席することが出来、誠に恵み以外にないと神に感謝している。

私は祈る時、「すでに叶えられたと信じて祈る」のみ言葉を堅く信じている。そしてその祈りの課題を思い浮かべ幻を頭に描きながら祈る。それは教会の各集会に、もつと多くの人達が出席し、喜んでみ言葉を聞き、心を一つにして祈っている姿である。また私達の教会が主の愛で満たされ、すべての人が、人を自分より優れた者と思ひ、他人の徳を高め合っている様子、主が一番喜ばれる素晴らしき交わりが心に浮かび、祈っていて楽しくなる。先ず牧師、役員のため、病の方、苦しみの中を通されて居られるかた、求道者等のための執り成しの祈りを続ける。

私達の教会には癌の手術をされ、病と苦しみの戦いを勝ち抜いて癒された方が沢山居られる。そのような方々が、同じ病で苦しまれて居られる方々を訪問し、祈り、お助けしている姿は実に麗しく幸いである。求道者に対しては、常に心を遣い、初めて教会へ来られた方々への気配りを重んじている。押し付けがましくなく、そつと優

しく聖書の個所を開いてあげたり、笑顔で接し、「神は愛である」を行動で示したいと励んでいる。暗い顔や、世間的な行動を慎み、一人ひとりが聖霊のお取り扱いにより、心から主の愛に満たされ、初めて教会の門を叩く方々に麗しい雰囲気を与えたいと励んでいる。

コンピュータへの挑戦

私が今年与えられたもう一つの個人的なヴィジョンは、本気でコンピュータに取り組む事である。幸いにして昨年日英両語の入るコンピュータを与えられて感謝である。

当教会では六十歳以上になってからコンピュータを始められ、チャレンジし教会のご奉仕をしておられる方がいる。また他にコンピュータで教会のご奉仕に励んで居られる方は大勢居られる。私もチャレンジし、大いに教会のご奉仕に励みたいと祈りつつ上からのお助けを仰いでいる。2001年はメンバーの一人ひとりが与えられている賜物を活かし、祈りを持って伝道に、集会に、学びに、新世紀の当教会の前進を目指して進みたい。

東洋宣教会・北米ホーリネス教団史(その十九)

戦後篇

オレンジ郡キリスト教会牧師・杉村宰

今回は、戦後の一九四五年から一九六二年までの、教会の三つの著しい働きについて記した。それは教団の堅実な成長への転換期とも云える時代であった。でも、この頃から教団としての全体的な働きよりも、それぞれのローカル教会の働きが顕著になり、全体として記すことが困難になってくる。その顕著な働きは教団政治が、監督制から委員会制に移行したということから判断できよう。つまり、一人の監督が全体を見て決断をするというのではなく、複数の経験ある者達が監理するようになった訳であるが、それは各個教会の自立性が尊ばれ、それぞれの牧師の主体性が重んじられねばならないという考えから生じたものである。特に自由奔放な生き方を求めるという時勢でもあったので、そのような動きが出てきたことは当然といえば、当然なのかも知れない。

さて一九六三年頃からは、教団の拡張時代が始まった。それは一九六七ころまでとしたが、丁度この頃から、今までになかった教団レベルでのリニューアル運動が顕著になり、新しい時代の到来を思わせるからである。特に一九七九年には日語部、英語部の礼拝出席総数が二千名を越えており、拡張時代といえるに相応しい成長が見られる。英語部が五百名を超えたのは一九六五年であり、日語部が五百名を越えたのは一九七六年のことであった。

一九六五年に吹上信一先生は葛原定市先生や佐久間ヘンリー先生の後任としてシカゴ南部のホーリネス教会に赴任する。しかし、教会の近隣の多くの日本人がシカゴの他の地区に移動してしまつた事もあり、四年後の一九六九年には閉鎖を余儀なくされ、残つた人々はレーキサイド教会に合流をする

事になった。その年に吹上先生はサンディエゴ教会に任命される。

一九七三年には、とても興味深い出来事が起つている。フリー・メソジスト教会から、一緒にならないかとのプロポーズを受けたのである。教義面でも共通事項が多くあり、戦前にあつた青年修養会などは一緒にしていたほどである。また戦中にはホーリネス教会と共に、長老教会やバプテスト教会というメイン・ラインからは熱狂的だと言われ、白眼視されていたこともあつて、同じ痛みを通つた同士というよしみがあつたのであろう。そこで、いざマリブにあるリトリート・センターで膝を突き合わせて話し合うことになつたのだが、それ以上は進展しなかつたようである。でもこのプロポーズの話、ちよいと惜しいとは思いません？

一九七八年は北米宣教百年記念大会が北加を中心に行われ、

様々な催し物が開かれた。ちなみに南加での宣教活動は北加より十年遅れている。この年に発表された日系教会統計資料によると、全米では合同メソジスト教会が断然多く、次が合同長老教会で、私達のホーリネス教会が三番目に多くなつている。ホーリネス教会がスタートした一九二〇年には、南加には既に二十余りの教会が存在していた。それが成長率では一番になり、数的には全米でも三番目になるまで成長してきたのである。

一九七九年は創設以来、北米ホーリネス教団にとって一つの大きな節目であつたと言える。というのは OMSI (東洋宣教会インターナショナル) から「ホーリネスという名称の変更をするように」という薦めがあり、各教会の決議と判断で、自由に変更出来るようになったからである。ホーリネスという名称は、ここアメリカでは、偏狂の意味に捕らえられ、誤解されやすいからである。だから、「どんな教会か」と問われる度に「いちいち教会教義の説明をしなくてはならない」という不便が生じていた。現在ホーリネス教会の名前を維持しているのは、ロサンゼルス教会、サンファンダ教会、ウ

エスト・ロサンゼルス教会の三教会のみである。

教団の大きな痛みであったが、一九七三年には福田吉郎先生と末広和先生が相次いで召されている。福田先生は、ロサンゼルス教会のメンバーであり、一九三〇年のサンディエゴ教会に始まり、ホルル教会、そしてサンロレンゾ教会に任命されている。更に北加において幾つかの教会開拓に大きく貢献している。享年八五才であった。末広先生は教団第二代監督であられた末広栄司先生の長兄にあたり、船乗りとしてシアトルに來た時に、船からジャンプして上陸したというツワモノである。そういう人たちを「ジャンパー」と言ったそう。なんと鷹揚な話ではないか。当時はそれで上陸出來たから面白い。先生は一九二一年に南加に來て、路傍伝道によって救われる。一九四七年にシアトルに遣わされて十六年間奉職される。享年七八才であった。

また一九七七年には石野幹夫先生が一七年間の尊い働きをされて召されていた。先生は一九四九年に教団に参加され、ポールドウインパーク教会（サンゲール教会の前身）に任命されている。以後ホルル教会、そして再びサンゲール教会に戻っておられ、七八才で召されている。

一九八七年には関口五十六牧師が五一歳にして召されている。彼はよく言ったものである。「日本には三人の五十六がいた」と。統計的に本当かどうか分からないが、それにしても若くして召されていた。娘さんのジャネットのあどけなさが痛々しかった。彼の葬儀は辛かった。皆が泣いた。慟哭した。そして思った。五十六なのだから、せめて五六才まで生きて欲しかったと。

一月六日（土）サンディエゴ教会で、大川道雄師、中野雄一郎師を講師に南加新年聖会が、一月七日（日）サンタクララ教会で中尾邦三師を講師に北加新年聖会が持たれました。

N・E・W・S

一月十三日（土）より十五日（月）まで、コイノニア・キャンブルランドで「ウインター・ヴィジョン・ユース・リトリート」が行われました。

細見剛正師を団長に二十数名の方々が一月十三日（土）より二

三日までの聖地旅行に参加しました。

一月二九日（月）より教団牧師リトリートが行われます。

二月三日（土）南加タウンホール・ミーティングが行われます。

二月十日（土）、サンゲール教会の新会堂献堂式が行われます。

篠田ダニエル師が南加に引越されることになり、二月二四日（土）篠田師夫妻の送別会がサンロレンゾ教会で行われます。

第62回（二〇〇一年度）北米ホーリネス教団夏期修養会
主題 リバイバルを求めて

神に喜ばれる生活

主題聖句「キリストに根を下ろして造り上げられなさい」

コロサイ一・七（新共同訳）

東京聖書学院院長

講師 小林和夫先生

日程 七月三日（火）～七日正午

会場 サンタバーバラ・ウェストモント大学

